

2020. 2. 21 (日) マタイ23:37~39

**23:37** エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。

**23:38** 見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。

**23:39** わたしはおまえたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」

<説教>

マタイの福音書23章の最後に来ました。

この23章は、(21:23 から始まって) イエスがエルサレム神殿の中でお語りになったこととしては、そして〈群衆と弟子たち〉に語られた(23:1)こととしては最後の説教でした。

律法学者やパリサイ人の行いが人の目にどれほど信仰深く見え、立派に見え、神を愛し人を愛しているように見えても、それは〈すべて人に見せるため〉の偽善であるとイエスは見破られました。

そんな彼らのまねをしてはならないとイエスは〈群衆と弟子たち〉を戒められたのでした。

そして、「これでもか、これでもか」と言わんばかりに、何度も「わざわざ」と律法学者やパリサイ人の偽善を厳しく非難なさいました(13-36)。

そんな厳しい非難は確かに律法学者やパリサイ人についてのものでした。

しかし、そのイエスの言葉を聞いていた〈群衆と弟子たち〉も、イエスの言葉によって自分たちの心を深く探られなければなりませんでした。

もし「自分たちはイエスが言われるような律法学者やパリサイ人たちのような偽善者とは違う。あれほどは酷くはない。」などと他人事のように聞き流すなら、まさに「もし私たちが先祖の時代に生きていたら、彼らの仲間になって預言者たちの血を流すということはなかっただろう。」(30)と高慢になっていた律法学者やパリサイ人と何ら変わらないことになってしまいます。

それで、もう何度も申し上げたことですが、私たちはこの厳しいイエスのみことばを、イエスの私たちにに対する愛と恵みに満ちた警告として聞くのです。

**23:37** エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。

**23:38** 見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。

**23:39** わたしはおまえたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」

イエスがここで呼びかけている〈エルサレム〉とは町の名というよりむしろすぐに続けて〈預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ〉と言われたように、神、

イエスに対する不信仰と不従順の民イスラエルを代表した名でした。

そしてその民の代表が律法学者やパリサイ人たちでした。

〈わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか〉と、イエスが言われたように、神は特別の愛情、子の幸いをこそ願う親の愛をもってイスラエルの民をご自分のもとに〈集めようとした（願った）〉のでした。

旧約の時代には〈預言者たち〉を〈何度〉もお遣わしになって、そうなさって来ました。

そして今やご自分のひとり子、御子イエス・キリストをお遣わしになり、イエス・キリストのみことばとみわざによって、ご自分の特別な愛を示し、イスラエルの民をご自分のもとに〈集めようとした（願った）〉のです。

実際イエスは既に何度かエルサレムとそこの神殿を訪れてもおられました。

幼子～少年のときは両親とともに行かれました（ルカ 2 章）。

そのとき幼子としてイエスは、信仰あり聖霊に導かれたシメオンや女預言者アンナに対して救い主としてのご自身を現されました。

っそいて二人は神を賛美し、人々にイエスのことを語りました（ルカ 2:25-38）。

また、12 歳の少年としてイエスはエルサレムの神殿でイスラエルの教師たちの真ん中で問答し、そのとき既に神殿は「自分の父の家」だと証しされました（ルカ 2:41-50）。

そして公生涯に入られてからもたびたびエルサレムに、神殿に行かれたことがヨハネの福音書には記されています。

2 章では「宮清め」をなさり、神殿を「わたしの父の家」と呼び、ご自分が神の子であることを明らかになされたことが記されています。

5 章では、やはり〈神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しくされた〉(5:18) ことが記されています。

7 章でも宮で教え、「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた方のものです。」(7:16)、「わたしはその方から出たのであり、その方がわたしを遣わされた」(7:29) と証しされました

続けて 8 章、9 章、10 章でもイエスはエルサレムでみことばを語り、力あるわざを行い、ユダヤ人たちとお語りになってご自分のことを、またご自分をお遣わしになった父なる神のことをはっきりと証しなさいました。

そのようにして、「父なる神がお遣わしになり、父と一つである神の子、キリストであるわたしを信じて、わたしに頼って、門であるわたしを通して入り、神の〈翼の下〉に集まれ。あなたがただけでなく、あなたがたの〈子ら〉も集まれ。」とイエスはエルサレムのユダヤ人たちに忍耐強く呼びかけて来られたのです。

しかし彼らはイエスを信じないで、逆にイエスが神を冒瀆したとして、イエスを石打にして殺そうとしました。

こうしてエルサレムは〈預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者〉そのものとなり、『もし自分たちが先祖の時代に生きていたら、先祖たちの仲間になって預言者たちの血を流すということを絶対にやっていたら』と白状したも同然でした。

「それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。」とイエスは言われました。

〈望まなかった〉とはイエスが〈集めようとした（願った）〉のとは全く正反対に、そんな神の思いを、愛の招きを拒んだ（見向きもしなかった、その気が全くなかった）とい

うことです。

それは神の忍耐の限りを尽くした愛に対する裏切り、忘恩、反逆でした。

それで、「見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。」とイエスは宣告なさいました。

〈おまえたちの家〉とは直接的にはエルサレム神殿のことでしょう。

神殿は、本来は〈わたし（イエス）の父の家〉（ルカ 2:49。ヨハネ 2:16）、神の家のはずです。

しかし、〈『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にしている。〉（マタイ 21:13）とイエスは言っておられました。

また、「わたしの父の家を商売の家にしてはならない。」（ヨハネ 2:16）とも言っておられました。

そのように本来は神が住まわれる「神の家」、「祈りの家」であるはずの神殿は、偽善の律法学者、パリサイ人たちが「占領」して利益を貪る「強盗の巣」「商売の家」となり果てていました。

偽善の律法学者、パリサイ人と彼らに習うユダヤ人によって霊的に死んだ形式だけの礼拝が行われ、自己満足と自画自賛、人間的誇りで満ちているそんな〈荒れ果てた〉所となっていました。

それでイエスは神殿がもはや神の家ではなくなり、〈おまえたちの家〉に成り下がってしまったと怒り、また嘆かれたのです。

イエスによる「宮清め」をもってしても神の家を自分たちの家におとしめている罪を認めず、悔い改めようとせず、かえって一層イエスを憎みイエスを殺すことしか考えない。

そんなもはや神とは何の関係もない、空虚な、独りよがりなエルサレム神殿は、そんな宗教は、そこであぐらをかいている偽善の律法学者、パリサイ人たちと彼らに習うユダヤ人もろとも神に〈見捨てられる〉ほかないと言われました。

そもそもその前に彼らが神の限らない愛とあわれみの呼びかけ、招きを拒みに拒み、イエスを見捨てて殺そうと堅く心に決めていたのですから、彼らと彼らの家が神から見捨てられても当然でした。

**23:39** わたしはおまえたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」

〈主の御名によって来られる方〉とはイエス・キリストにほかなりません。

つい先日イエスがろばの子に乗ってエルサレムにお入りになるときに群衆は「ホサナ、ダビデの子に。祝福あれ、主の御名によって来られる方に、ホサナ、いと高き所に。」と叫んではいました。

しかしそれも心からのイエスに対する信仰というよりは、この世的なメシヤ観から熱狂していたにすぎませんでした。

そして同時にそんな群衆の言葉を苦々しく憎々しく聞いていたのが律法学者やパリサイ人たちでした。

どちらも誰もイエスを信じてはいませんでした。

正しい霊的な目ではイエスを見ていませんでした。

本当の意味ではイエスと出会ってはいませんでした。

「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」と、イエスを信仰によって受け入れて初めてイエス・キリストと出会うことができるのです。

イエスは律法学者やパリサイ人たちに見捨てられ、十字架で殺されましたが、同時にそれは私たちの罪を贖い、赦すための、私たちを救うための十字架の死でした。

そのためにご自分をこの地上にお遣わしになった父なる神に完全に従われたイエスを神が三日目によみがえらせなさいました。

こうしてイエス・キリストは罪と死に打ち勝たれました。

イエス・キリストこそ本当の神の神殿です。

この十字架の死と復活のイエス・キリストを信仰によって受け入れて、神の子として神に受け入れていただき、キリストのからだの部分としていただき、自分自身を、キリストの御霊、聖霊が住まわれる宮、神殿としていただくことが大事なのです。

そして、私たちはこの地上に生きているうちはなお完全ではありません。

むしろ日々何らかの罪を犯す者です。

悪魔がいつも狙い、神を侮り、イエスから離れるように私たちを誘惑して来ます。

だから私たちが決して自分から神を侮り、イエスから離れることがないように、神に対する聖なる恐れと慎みを持つように、厳しくも愛とあわれみに満ちた神の戒めや警告が必要なのです。

父なる神から、イエス・キリストにあって、神の子として取り扱いを受けている、神の子として戒めを与えられているのだと受けとめるのです。

それは「もしかしたら私はこの律法学者やパリサイ人なのではないか？どうか？」などと考えて悶々（もんもん）と悩むということではありません。

そうではなくて、むしろさっさと、きっぱりと「私は律法学者やパリサイ人と同じように、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者だ。どうしようもない偽善者だ、罪人だ。その意味の限りにおいて私も〈彼らの仲間〉だ。」と認めることです。

そして、この律法学者やパリサイ人と一つだけ違おうとすれば、それは「神様、罪人の私をあわれんでください。」（ルカ 18:13）と言って常にイエス・キリストを信じて神に立ち返る（悔い改める）ことです。

〈もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。〉（Iヨハネ 1:9）

律法学者やパリサイ人のわざわいを取り去り、イエス・キリストにある幸いな者にしてくださいます。

これが、神の、イエス・キリストの変わらない確かな約束なのです。